



青木付近で本格的に栽培されるようになったのは江戸時代中期である。この地帯は、会津地方の中でも指折りの洪水常習地帯で、近くを流れる鶴沼川、大川が氾濫し、農作物はいつも損害をこうむっていた。藍は他の農作物に比べ洪水にも強く、濁水がかぶっても大丈夫だったことから藍の栽培が広く行われるようになったという。

江戸時代、生産が始まった当時の青木木綿は主に農家が自家用に織るものが大半で、商品として市場で売買されるようになるのは、紡績糸が登場してからのことである。

青木地区が会津木綿の中心になったのは、藍の栽培が盛んだったことと、紺屋へ近隣町村の人々が糸染を依頼に来ていたこと、前述のように綿の栽培も早くから行われていたことなどによると思われる。

青木木綿の特徴は、すっきりとした縞柄であろう。無地織もあるが大半は縦縞か格子縞で、元来、普段着や仕事着、夜具などに用いられてきたことから、太番手の綿糸でやや厚地に織上げられている。

古くは農家の冬期間の副業として

はた織りは欠かせない存在だった。「昔は冬も深まると、あちこちの家からトンカトンカラとはた織りの音が聞こえたものです」。

昭和三十年代中頃以降、農家の仕事着としての需要が急減すると、青木木綿を織る家

もめっきりと少なくなり、昭和初期に六軒あった機業場は次々と姿を消して、現在ではわずか二軒を残すのみになってしまっている。

しかし今では化学染料を使わない藍染めの美しさと、昔ながらの素朴な風合い、そしてすっきりとした縞模様が見直され、会津地方を代表する民芸織物としての需要が伸びてきている。

素材はあくまで純綿を守りながら、縞柄に改良を加え、着尺地や洋服地などの用途にも使われている。単調なはた織りの調べの中、縦糸と横糸が織り成し生まれる縞模様は、会津に生きる人々の心のように

素朴で、美しい。



昔はあちこちの家からトンカトンカラとはた織りの音が聞こえてきたものです。